

当科における歯の外傷の実態調査

○柏村晴子、久保山博子、葉山康臣、馬場篤子
木山純子、河野美佐、本川 渉
福歯大・成長発達・小児歯

【目的】小児における歯の外傷では、生理的歯根吸収を有する乳歯や歯根未完成の幼若永久歯といった、成熟した永久歯とは異なった問題があり、その対応は容易ではない。今回演者らは歯の外傷を主訴に来院した患者に対して外傷歯の実態調査を行ったので報告する。

【対象】平成14年から15年にかけて歯の外傷により、福岡歯科大学附属病院の小児歯科外来に来院した男子67名、女子33名、計100名で、対象歯は乳歯130歯、永久歯83歯、合わせて213歯について調査を行った。

【結果】1)受傷時年齢：乳歯では4, 5歳児、永久歯では7, 8歳児に多く、乳歯、永久歯とも男児が女児の約2倍であった。
2)受傷部位：乳歯、永久歯ともに上顎切歯部が多く、特に上顎乳中切歯、永久中切歯が圧倒的に多かった。
3)受傷様式：乳歯では、動揺、脱臼がそのほとんどを占めていた。永久歯でも動揺が圧倒的に多く、ついで歯冠破折が多かった。
4)来院までの時間：受傷当日の来院が最も多かったが、その一方で受傷後1日以上経過して来院する患児も少なくなかった。
5)受傷原因：乳歯では転倒が多く、衝突、転落がそれに続く。永久歯でも転倒が多く、ついで衝突であるが、乳歯より衝突の割合が高く、打撲も増えていた。

【考察】従来、乳歯外傷は1, 2歳児に多いと報告されているが、本調査結果では4, 5歳児に多く認められ、乳歯外傷の受傷年齢が高くなっていった。またその原因として4, 5, 6歳児の衝突が目立っていた。永久歯では乳歯と比較すると歯冠破折が3倍多く、またそれに伴って歯内療法も多くなっていた。今後、我々は、このような現状に適切な対応が出来るように準備し、また、園児に対しても外傷に関する啓蒙の必要性を感じた。

歯科治療用実体顕微鏡を用いた保存的修復法について

○何 陽介、尾崎正雄、泉福浩志、小笠原榮希
若江紀子、本川 渉
福歯大・小児歯

【目的】

近年小児の齲蝕は減少および軽症化が著しく、過去に見られたようなアンレーやインレーによる歯冠修復が少なくなってきており、コンポジットレジン充填などを多用した修復が主流をなしてきた。最近では、歯科治療用実体顕微鏡や低粘性コンポジットレジンが各社より販売され、より小さな窩洞にも充填が出来るようになってきた。このような最小限の修復処置いわゆる Minimum Restoration (以下MRと略す)を実施することにより、残存歯質の可及的保存ならびに審美的保存修復が出来るようになる。そこで演者らは、歯科治療用実体顕微鏡を用いて現在市販されている最小の切削用ダイヤモンドバーによる形成を行い、その有用性について検討したので報告する。

【方法】

実験材料としてC1程度の齲蝕を有した抜去歯牙を用い、歯科用実体顕微鏡(MANI社製：DMS25ZT)下において齲蝕検知液で罹患歯質を明示させMANIダイヤモンドバー(No.CD50F,53F,56F)および1/4または1/2コントララウンドバーを用いて、残存歯質を極力確保した窩洞形成を行った。そして、SEMにより従来から行われているコンポジットレジン充填窩洞との比較を行った。

【結果】

1. 実体顕微鏡下で形成された窩洞は肉眼で形成するよりも小さな切削器具を操作することができた。
2. 形成された窩洞は、一般に使用されている形成用ダイヤモンドバーによる窩洞よりも明らかに歯質削除量が少なかった。
3. 同様の処置で行った臨床例では、2年経過後も2次カリエス、辺縁破折等もなく、極めて良好な状態を維持していた。

【考察】

今回、我々は歯科用実体顕微鏡下でMR窩洞を形成し、低粘性コンポジットレジン、フィッシャーシーラントを応用したレジン修復を行った。その結果、歯科治療用実体顕微鏡下でのMR窩洞形成は、齲蝕が軽症化する小児歯科臨床にとって有用な方法と思われ、また、歯質削除量を少なくするためには、より細かいバーの開発が必要であると思われた。